

機関番号：24402

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520073

研究課題名（和文）京城帝国大学と台北帝国大学の設立と廃校の思想史的意義

研究課題名（英文） The meaning of intellectual history of establishment and closed down about the Keijo Imperial University and the Taipei Imperial University

研究代表者

高坂 史朗 (KOHSAKA SHIRO)

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：20170178

研究成果の概要（和文）：日本は植民地朝鮮と台湾の地に帝国大学を設立した。1924年に京城帝国大学が、1928年に台北帝国大学が設置され、日本の教育制度がそのまま適用され運営された。これは1945年の日本の敗戦まで続いた。その地で「哲学・哲学史」講座を担当した安倍能成と務台理作を中心に「植民地教育」が日本の知識人の思索のどのような影響を与えたかを論じた。また李光来著『西洋思想受容史』を翻訳出版し、その「解題」に東アジア（中国・朝鮮・日本）の西洋思想受容の特色を比較する考察をなした。

研究成果の概要（英文）：During the colonial era, Japan established the Imperial University in Korea and Taiwan. Keijo Imperial University was established in 1924 and Taipei Imperial University in 1928. Before its abolishment in 1945, Yoshishige Abe and Risaku Mutai were in charge of the course "Philosophy and History of Philosophy". My research focuses on how they have influenced colonial education during their period of tenure. Related to this I have translated "History of Western philosophy in Korea" by Lee Kwang Rae, including a commentary titled "Western Thought and East Asia".

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：思想史

科研費の分科・細目：東洋・日本思想史

キーワード：東アジア 思想史 植民地教育政策 京城帝国大学 台北帝国大学 比較思想

1. 研究開始当初の背景

研究代表者高坂史朗は「東アジア間の思想的対

話」を目指して中国・韓国・台湾などの研究者との議論を重ねている。その議論の前提として日本の戦争責任と戦後の歴史認識が喫緊の課題となる。そこで前回の科研では 1930 年代の東アジア間の思想的葛藤を明らかにした。その場合、日本がかつて植民地とした朝鮮と台湾の地にどのような教育を展開したかが課題として浮き上がった。その際ソウル大学・台湾大学に残るかつての日本の教育上の文献が手つかず状態であることが明らかとなった。そこで朝鮮と台湾に日本の帝国大学を設立したいきさつと残留文献に関する研究調査をすべく「京城帝国大学と台北帝国大学の設立と廃校の思想史的意義」という研究テーマを設定した。

2. 研究の目的

1924 年日本の植民地朝鮮の京城に京城帝国大学が設立された。また 1928 年には台湾の地に台北帝国大学が開学した。2 つの帝国大学は 1945 年に廃校となったが、この「京城帝国大学と台北帝国大学の設立と廃校の思想史的意義」を以下の 5 つの視点から明らかにすることを研究目的とした。

(1) 植民地政策としての帝国大学設立の意図とその背景

京城帝国大学と台北帝国大学は最終的には 9 の帝国大学の一環として設立されている。したがって施設、講座数、教員資質など日本国内の帝国大学と同様の形式で設立された。京城帝国大学は九州帝国大学を模範としている。しかも同時に朝鮮内の民間大学設立運動を封じ込める働きでもあった。他方、台湾内では初等教育の充実を優先するべきだとの意見の中で高等教育機関である台北帝国大学を作り上げた。その政治的背景を明らかにする。

(2) 大学の学問の中立性と総督府との関連

とくに京城帝国大学は自由主義的で総督府と対立を繰り返した。また朝鮮独立の運動家も生み出した。逆に総督府官僚の養成機関という側

面もあった。

(3) 両帝国大学の位置する地域的・風土的特性

大陸侵略の拠点としての京城帝国大学と南方経営の台北帝国大学の位置づけがなせようが、さらに風土的特質を考えたい。

(4) 1945 年の敗戦にあたっての混乱と対応

ソウル大学は大学としてはその継承を否定しているが、医学部や理工学部の理系の出身研究者・技術者のつながりは存在した。また法文学部出身の朝鮮人学生が韓国、北朝鮮の建国の政治的リーダーとなった。

(5) 戦後の韓国・朝鮮、台湾および日本に与えた思想史的影響（今日から見ての考察）

戦後の東アジア史の観点からこの思想史的影響を考察する。たとえば、引き上げた日本人教員・学生の戦後の発言は日本の戦後民主主義にも大きな影響を与えている。また、韓国、台湾ではその植民地時代を「断絶の時代」として両帝国大学の出身者たちを「親日」として葬り去ったのか、あるいは継承されたのかを今日的視点で考察する。

そしてその際、当地の研究者との対話的連携を心がけた。

3. 研究の方法

文献研究と現地調査および研究者間議論によって行った。

(1) 文献研究は日本語文献・朝鮮語文献・中国語文献を渉猟し、批判的に問題考察を行った。

①日本語文献：国内に残る朝鮮総督府・京城帝国大学関係、台湾総督府・台北帝国大学関係の文献を渉猟した。ただ、敗戦の混乱によって当地から学籍簿やその他の重要書類が持ち出せず、日本語文献としては、その後関係した人々の記憶、あるいは思い出として語られるものに依存せざるを得ないのであるが、植民地支配の苦い思い出は多くの人々は語っていない。その点の

資料的限界がある。

②朝鮮文献：その後起こる朝鮮戦争により多くの文献が散逸し、また戦後「親日」「反日」の問題からソウル大学に残る文献も封印され、今日も閲覧が制限されている。

③中国語文献：台湾大学の場合かなり散逸している。愛知大学等日本における文献は確認した。

(2) 現地調査はソウルと台北および植民地政策比較のためドイツ・ロシアへ調査研究を行った。大学図書館の閲覧や研究者の聞き取り調査を行った。

(3) 研究者間議論のために上記現地調査地に加え北京・釜山・ウィーンにも赴き研究者と議論した。

4. 研究成果

(1) 京城帝国大学の設立の歴史的背景、その思想的意義を明らかにした。とくに初代の法文学部長を務めた安倍能成の哲学・思想展開、朝鮮総督府との衝突などの問題が明らかとなった。また高橋亨、時枝誠記、大関将一ら京城帝国大学に勤務した人々の学問のあり方を明らかにした。さらに京城帝国大学を卒業した哲学の学徒たちの思想的活動を研究した。

(2) 台北帝国大学の文政学部へ赴任した務台理作の苦悩を考察した。また史学の学問展開に触れ、戦後の台湾大学の発展も考察した。

(3) この両帝国大学の学者たちの戦後の活動と戦後民主主義の関係を明らかにした。

(4) 京城帝国大学出身者のその後、すなわち戦後の活動は朝鮮の政治文化に大きな影響を及ぼしている。また台北帝国大学出身者の戦後の台湾での活動を明らかにした。

(5) 京城帝国大学と台北帝国大学の図書やその他書類がそれぞれの継承大学ソウル大学、台湾大学に残っている。しかし、ソウル大学は閲覧できなかった。台湾大学は貴重書のみが保存されていたがそれ以外の書類は散逸したようである。

(6) 比較研究のためにロシア・サンクトペテルブルク大学に赴き、サンクトペテルブルク大学に残る「有栖川コレクション」を調査した。さらに「三笠宮文庫」がロシア・アカデミーにあり、日ロ間の問題を考察する上で非常に重要な文献コレクションであることが判明した。この件に関してはサンクトペテルブルク大学学長および在日本領事館の助力の申し出を受けた。今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 高坂史朗「植民地帝国大学に立つ二人の哲学者——京城帝国大学の安倍能成と台北帝国大学の務台理作」近畿大学日本文化研究所編、査読有、叢書第6巻『日本文化の攻と守』(風媒社2011年3月10日発行総281頁 p.88-114)
- ② 高坂史朗「東アジアと西洋思想」李光来著『韓国の西洋思想受容史』高坂史朗・柳生真共訳、「解題」(御茶の水書房2010年12月総頁340 p305-319)
- ③ 高坂史朗「「内在的超越」としての大乘仏教」近畿大学日本文化研究所編、査読有、叢書第5巻『日本文化の中心と周縁』(風媒社2010年3月10日) 総頁285 p.161-182
- ④ 高坂史朗「日本文化を語ることのアポリアー—独自性・世界性・閉鎖性・相互性」近畿大学日本文化研究所編、査読有、叢書第4巻『日本文化の美と醜—その形式と融合—』(風媒社2009年3月10日総頁361 p.162-184)

[学会発表] (計5件)

- ① 高坂史朗招待講演「東洋と西洋の統合という課題」(韓国語) 2009年6月25日釜山大学主催国際シンポジウム「近代における東アジアの古典形成」
- ② 高坂史朗「内在的超越の宗教観—東アジアの

宗教との対比において」2009年9月13日 日本宗教学会 京都大学 パネルセッション「西田幾多郎の宗教思想」

- ③ 高坂史朗招待講演「武士道といふは死ぬことと見付けたり」北京日本学研究中心・中華日本哲学会主催「東アジア「武士道の研究」国際シンポジウム」北京外国語大学・北京日本学研究中心2009年1月15日
- ④ 高坂史朗招待講演「比較という視座」台湾大学高等人文学研究所 2008年12月12日
- ⑤ 高坂史朗招待講演「玄海ツツジを愛した安倍能成一京城帝国大学の設立と廃校の思想史的意義」韓国日本思想史学会 2008年11月29日ソウル淑明女子大学

〔図書〕(計1件)

李光来著『韓国の西洋思想受容史』高坂史朗・柳生真共訳(御茶の水書房 2010年12月総頁340)

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/asia/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高坂 史朗 (KOHSAKA SHIRO)
大阪市立大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：20170178

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし